

南の国の「ナデシコ」税理士

成功へのキセキ

第43回 親は子どもを選べない?!

いま私のマイブームは、将棋の藤井聡太六段です(笑)。知らない人はいないと思いますが、念のために彼のプロフィールを、時系列で説明しておきますね。

中学3年生で史上5人目の中学生プロ棋士になった。しかも最年少。AbemaTV主催の将棋番組で、非公式ながら羽生善治竜王に勝った。新人プロの連勝記録15連勝を更新した。さらにプロ棋士全体の連勝記録28連勝も更新した。名人戦C級2組で全勝し、最年少で四段から五段に昇格した。全プロ棋士参加の棋戦に、最年少で優勝し、わずか2週間で六段になった。しかも準決勝で、羽生善治竜王に勝っての優勝。

現実が漫画を超えた!と、話題になりましたよね。この漫画とは、映画化もされた「3月のライオン」のことです。私は映画の方しか観ていないのですが、主人公の桐山くんは、高校生プロ。時期的に映画の方が早いので、桐山くんは、まさに5人目の中学生でプロになった天才という設定です。映画は、「竜王戦?」の決勝で、羽生善治竜王と思われる偉大なプロに挑むところで、終わっています。

映画の主人公は、交通事故で両親を失い、天涯孤獨。友だちもなく、将棋だけが彼の心の支えです。唯一の理解者である高校の先生が、「お前、ひょっとして俺の年取、超えてるだろ?」と聞くと、桐山くんが黙って頷くシーンがあり、現実の藤井くんより、こちらの方がよほどリアリティがあります(汗)。

もし自分の子どもが、天才だったら。笑われるかもしれませんが、自分だったら、どう子どもに向き合うべきなのかと、想像することがあります。

きっと最初は、単純に嬉しいに違いありません。子どもが才能を発揮して、世間からも注目を浴びるようになる。我がことのように、喜ばない親はいないでしょう。

でも、やがて「普通の子ども」ならあり得ない悩みが、生まれてきます。たとえば、藤井聡太六段の場合は、高校に進学すべきか、プロ棋士に専念すべきかを、迷っていた時期がありました。高校生活とプロ棋士は両立が難しいこと。棋士としての成長期である10代のうちに、学校などは行かず将棋に専念した方が、より強い棋士になれるからです。

けれど…。

想像の域は出ませんが、もし私が聡太くんの母親だったら、自分の子どもが高校にも行かないだなんて、受け入れるのは、ものすごくハードルが高いことです。

幼児教育の一つとして、子どもに囲碁や将棋を習わせるママは、たくさんいます。私もムスコに、チェスや将棋を教えました。私のレベルが低いので、小学校の低学年になると、ムスコにはかなわなくなりました。でも普通は、それで十分。凡人は、学校の成績が良くて、少しでもいい大学に行ってくれたら、それで満足なのです。

私は人間の器が小さいので、ムスコが、親と同じレベルの凡人だということは、もしかしたらものすごく幸運なことではないかと思う今日この頃です。

これとは反対に、生まれながらに障がいをもっていたり、重い病気の子どもの親になる人もいます。そんな時、「子どもは親(貴女)を選んで生まれてきたのよ」と言われることがあります。

戸沢財団の活動をしていると、そういう子どもたちに、たくさん、たくさん出会います。そしてママたちは、確かに神々しいほどに愛情をもって、子どもの世話をしています。

プロの看護師さんさながらの手つきで、テキパキと点滴したり、身体を拭いたり。仕事も辞め、夢をあきらめて、24時間つきっきりで、子どもにつきそわなければなりません。

それでも、この子のおかげで、たくさんのことを学んだと微笑むママ。子どもが「この人なら大丈夫!」と選んで、生まれてきたという言葉にも、納得させられますね。

けれど、児童養護施設では、状況は一変します。子どもの入所理由の一番は、育児放棄いわゆるネグレクトと言われています。

自分の子どもの育児を放棄するなんて、考えられない、だったら最初から産まなければいいのに…。

と、私も思っていました。昔は。けれどよく事情を聞いてみると、親自身が発達障がいを抱えていたり、うつ病を患っている人たちが、とてもたくさんいるのです。

そんな親のところにも、もし障がいのある子どもが生まれたら…。

◆筆者 原 尚美 (はら なおみ) プロフィール

税理士。東京外国語大学卒業。TACの全日本答練(現:全国公開模試)「財務諸表論」「法人税法」で全国1位の成績を収め、税理士試験に合格。直後に出産。育児と両立させるため、1日3時間だけの会計事務所からスタートし、現在は全員女性のスタッフ約30名の規模にまで成長。一部上場企業の子会社やグローバル企業の日本子会社などをクライアントにもつ。ミャンマーに会計サービスの会社を設立し、海外進出支援にも力を入れている。著書に『小さな会社のための総務・経理の仕事がわかる本』『小さな起業のファイナンス』(いずれもソーテック社)、『51の質問に答えるだけでできる「事業計画書」のつくり方(日本実業出版社)』『トコトわかる株式会社のつくり方(新星出版社)』『世界一ラクにできる確定申告(技術評論社)』『一生食っていくための土業の営業術(中経出版)』など。その他、「経理ウーマン」「デイの経営と運営」など雑誌への寄稿や、商工会議所、中小企業投資育成株式会社、日本政策金融公庫などでの、セミナー実績も多数。

自分が生きるだけでも精いっぱいなのに、子どもの世話までは、とても手が回りません。結果、育児を放棄したり、もっとひどい時は暴力を振るってしまった…ということが起きてしまうようなのです。

そして、社会の隙間にこぼれ落ちた、そういう家族を救う社会のシステムが、いまの日本には機能していません。

最近、こんな事例がありました。

発達障がいのご両親が、6人の子どもを抱えて、アパートはゴミ屋敷と化していました。ご両親は、その特性のために片づけができないだけでなく、定職にもつけないため、生活は困窮していました。子どもたちは、食べるものも満足に食べられず、着るものも汚れ、身体中にゴキブリの匂いが染み付いていたと聞いています。

本来なら、児童相談所が子どもたちを保護すべき事例だと思います。しかしご両親が子どもと離れたくないと、これを拒否し、それ以上、行政からの保護を受けることはなかったとのこと。栄養失調と不衛生な環境のため、子どもたちの皮膚がただれてしまい、見かねたNPO法人が家族ごと、引き取ったという案件です。

戸沢財団は、子どもたちのランドセルや清潔な服など、生活に必要なものを支援しましたが、一家の生活費までは補てんできません。結局は、自力で生きる方法を見つけてもらえないのですが…。

正直に告白すると、子どもの貧困問題は、難しすぎて私の手には負えません。子どもたちにとっては、ゴミ屋敷でも親と

一緒に暮らすことが幸せなのか、施設に引き取られて、清潔な環境で十分な食事と教育を受けることが幸せなのか、正解は一つではないのだと思います。

私は、子どもたちに愛情を注いでいる施設のスタッフたちが、たくさんいることを知っているの、子どもたちが施設に入り、一人前の社会人になってから、逆にご両親の面倒を見られるぐらい、自立した大人になって欲しいと願いますが…。そうでなければ、貧困の連鎖が続いてしまうような気がするからです。



卒業祝いのプレゼント

この3月、戸沢財団で支援している児童養護施設出身の子ども二人が、専門学校と短大を卒業しました。彼らは、これから文字通り、本当に文字通り、一人で生きていかなければなりません。

親は子どもを選べない。そして、子どもも、親を選べない。それでも、生まれてきて良かった! そう思える人生を歩めるように、これからも彼らをサポートしていこうと思っています。

マイナバー対応

最新 小さな会社の総務・経理の仕事がわかる本

原 尚美 著、吉田 秀子 著 (ソーテック社) 1,400円+税

総務・経理の仕事…すべてをできるようにするには、とても時間がかかります。大きな会社に入社しても、小さな会社に入社しても、たくさんのことを覚えなくてはなりません。そんなとき一番困るのが、必要書類がわからない、書類の書き方がわからないといったことです。本書は、必要な書類とその書類の書き方の注意点のサンプルをできる限り掲載しています。総務・経理のしごとに関わるすべての人に読んで、参考にして頂きたい本です。